

ダンジョンに
出会いを求めるのは
間違えるだろうか

大森 藤ノ

OMORI FUJINO
イラスト ヤスダスズヒト
YASUDA SUZUBITO

試し読み版

一步。

地面を、蹴り抜く。

『イイアッ!』

すれ違いざまに振り抜いた刀身。

背後に置いてきたモンスターが短く鳴き、どさりと地面に崩れ落ちる音が響いた。

振り向くと巨大な単眼を持った蛙のモンスターが、切り裂かれた部位から赤黒い体液をぶちまけて事切れている。

長い舌を撃ち出して冒険者を攻撃する蛙のモンスター、『フロッグ・シューター』。

落ち窪んだ目でモンスターの死骸を無感動に見つめていた僕は、背を向けてその場から歩み出す。

疲労を訴える四肢に構うことなく、視界の中で動くものだけに神経を研ぎ澄ませ、錯綜する迷路の奥へ奥へと入り込んでいった。

平らな床と壁、天井から作られる秩序だった迷路の構造。

どこまでも続く画一で無味な空間の連なりが、あてもなくさまよう僕の進路に随伴してくる。昼間の探索とは打って変わって、ダンジョンは薄ら寒いくらいに静けさを保っていた。モンスターはおろか冒険者の気配もまるで感じられない。

自分の土を踏みしめる音だけが、曲がりくねった通路に響いていく。

「……」
幽鬼のような足取りでダンジョンを進みながら自分の体を見下ろす。

防具の一つも纏っていないただの私服姿。体のあちこちにモンスターの爪が、牙が、殴打が掠めた跡が残っている。ほろほろの衣服はまるで追剥ぎにでもあったかのようにだ。

右手が握っている、万が一のために所持していた護身用の短刀は、無数の怪物の血に染め上げられ、濡れていた。

(ほろほろだ……)

装備も碌に調えず傷だらけになっている自分の体を他人事のように感じながら、僕は足を止まずに少しの間、目を瞑る。

走って、走って、走って、走った。

酒場から飛び出し街の中を突っ切り、ダンジョンに飛び込んだ。

無理性でただひたすらにモンスターを追い求め、迷宮内を走り続けた。

振るって、振るって、振るって、振るって。

弱くてみじめな自分の力を認めて、自棄になった。

絶えず湧き出てくる悔しさを糧にして、手の中にあるたった一つの武器を振るい続けた。

遥か遠くにいるあのひととの距離を埋めようと、どれほど険しく困難なかさえわかつていな

い高みへ辿り着こうと、ただ必死に。

馬鹿みたいに熱を灯す胸の奥の意志に、全身を委ねた。

(……ここ、どこだろう)

そうして、今。

理性を手放していたピークは過ぎ去り、身を焦がしていた熱もある程度は引きつつあった。

狩り続けていたモンスターとの遭遇が途絶えてしまったこともあり、僕の頭はようやく現状把握に努めようと、白濁している思考を働かせ始める。

僕を取り囲むダンジョンの壁面はこれまで見慣れていた薄青色のものから変色し、淡い緑に染まっていた。通路の幅も極端に細くなり、迷路の構造自体がより複雑化している。

先程まで出くわしていたモンスターの種類も、今まで交戦してきた低級モンスターとは異なっていた。

(5階層……いや、6階層)

曖昧な記憶を手繰り寄せ、自分が下った階段の数を計算し、結論する。

どうやら、僕はこれまで足を踏み入れたことのなかった新階層にいるらしい。

酷く実感が湧かないまま未到達だった6階層を徘徊し続ける。引き返す、という選択肢は、ほとんどの感覚を麻痺させている今の僕が考えつくことはなかった。

意識を希薄にしたまま、何かに突き動かされるように、次なる標的を探し求めてしまっ

る。

「はっ、は……」

口から漏れる息が静かに乱れている。疲労は思ったより蓄積ちくじくされているのか。

ダンジョンにもぐって既にどのくらいの時間が経過しているのかもわからない。

迷宮内は天井が宿す燐光りんこうによって光源に困らない代わりに、夜になろうと朝を迎えようとする眩しい光が途切れることはない。時計を持っていない今の僕には、現時刻を確認する術は皆無だった。

(……こは)

歩みを重ねてしばらく。僕は部屋状の広い空間に辿り着いた。

広間は正方形を形作っており視界を隔てるものは何一つない。薄緑色の壁面だけが広がる空間は殺風景で閑散としている。

僕は部屋の半ばまで足を進め中央付近で立ちつくす。ざっと周囲を眺めてもこの広間から先に通ずる道は見当たらない。どうやら僕のもと来た道が、この広間に繋がる唯一の出入り口のようなのだ。

そして、この場は行き止まりだと理解した虚ろうつろの眼の僕が、引き返そうと体を後ろに回した——その直後だった。

ビキリ、と。

「」

ビキリ、ビキリ、と。

静まり返っていた広間に、何かが割れるような、得体の知れない音が響く。

足を硬直させた僕は弾かれたように顔を上げ、辺りを大きく見回した。

遮敵物しやくていぶつのない広間にモンスター姿はどこにも見られない。ただ不穏な音塊が断続的に鼓膜こまくを揺さ振ってくる。

初めて直面する事態を前に、頭の片隅で提示されるのは、一つの可能性だった。

僕は【ステイタス】によって強化された五感——今回は聴覚を頼りに音の出所を探り、導かれるようにそこへ視点を移す。

薄緑色に染まった、ダンジョンの壁面。

正面に位置するその迷宮の壁の一部から、音の規模は徐々に大きくなっていく。

間もなく、視線の先のダンジョンの壁が破れた。

「……！」

モンスターは、ダンジョンの中で産まれる。

今まさに目の前で行われているように、迷宮壁を内側から破り一個の生命として誕生するのだ。成長の過程を飛ばし、すぐさま戦闘にも臨める強靱な成熟体として。

この巨大な地下迷宮は、人類を脅かすモンスターの母胎に他ならない。

生じた亀裂から飛び出した怪物の手が宙をもぐ。力任せに壁面に鱗を刻んでは一つ、また一つと体のパーツを外気に晒していく。ばらばらと地面に落下するダンジョンの破片。

最後に一際大きな破砕音を鳴らし、モンスターは地面に足をついた。

一言で言い表すならば、『影』だった。

身の丈は一六〇センチほど。僕とほぼ同等の体軀は手足の先から頭の天辺まで黒一色に染まっております、その二腕二足のシルエットは限りなく人の形に近い。が、毛や体皮といったおよそ動物らしい組織物は何一つなく、その全身はあたかも黒いペンキで塗り固められているかのようだった。

唯一、十字の形を描く頭部に顔面と思しき手鏡のような真円状のパーツがはめ込まれている。影がそのまま浮かび上がったような異形の怪物。

6階層出現モンスター、『ウォーシャドウ』。

「っ……っ！」

がしゃりっ、と後方からも上がる音に振り向けば、もう一体のウォーシャドウが同じようにダンジョンの壁から産まれ落ちるところだった。

挟み撃ち。

いや、二対一。形勢不利。

あれだけ沈黙を貫いてきた状態から一転して——あたかも畏に陥れるように——ダンジヨ

ンが本性を現してきた。

「……」

発声器官が備わっていないウォーシャドウ達は無言で体を起こし、静かに臨戦態勢を作る。

不可思議な光沢を発するその顔の鏡面で、獲物のことを真っ直ぐ見据えてきた。

「……はッ」

呼吸を一つ吐き出し、赤く汚れてしまった短刀を握り直す。

恐らくはもう、取り返しがつかないくらいには、捨て鉢になっっているのだと思う。

脳裏に灯るのはあの酒場で起きた光景のみ。叩きつけられた現実は冷めつつあった体を容易に再燃させるほどの熱量を持つ。

本能が打ち鳴らす早鐘を無視して、僕は、目の前の無謀な戦いに身を投じた。



ウォーシャドウは鋭利な『指』を持つ。

異様に長い両腕の先には三本の指が備わっており、鋭い切っ先を持った三指はナイフの形状そのものだ。ゴブリンやコボルトとは比較にならない移動速度で這い寄っては、その両手の武器を用いて攻撃を仕掛けてくる。

ウォーシャドウの純粹な戦闘能力は6階層のモンスターの中でも随一ずいいちと言っている。

『上層』と定められるダンジョン1階層から12階層の内、新米の冒険者では敵かたわないモンスターの筆頭だ。

「っっ!」

事実、その通りになった。

一方的に攻められ、傷を負う。

二匹のウォーシャドウが繰り出す攻撃は単調でありながら睥目どうらむするほどの威力と速度を秘めていた。これまで体験のしたことのない速さで黒手が振るわれ、衣服ごと肌を薄く抉えぐっていく。長いリーチを誇る腕はどこからでも伸びてきた。決定的に異なる射程距離の長さに僕は自分の間合いへ相手を引き込めない。近付くことを、許されない。

今まで目にしてきたモンスターとは勝手が違う。

反撃がままならないほど、付け入る隙すきが見出せないほど、逃げ出すこともかなわないほど。ただただ単純に、強い。

「……」

「ぐ——っ!」

一言も発さずに放たれる、致命傷級の難撃。

鉤爪かぎづめ状に折り曲げられた三枚の黒刃くろびが瞳の隅から急迫し、鼓動を高く跳ねさせながら何とか

回避したかと思えば、今度は視界外から別の一撃が伸びて薄皮一枚のところを掠かすめていく。

前から横から後ろから。

僕を中心に都合四本の黒い長腕が絶え間なく泳いできては行き来を繰り返す。

僕は体を独楽のように連続で回してモンスターの同時攻撃を凌しのいでいた。ぶれる視界の中では大量の汗と赤い血の粒が舞い散っており、ともすれば、崖がきつぶちで命懸けのダンスを踊っている錯覚さくかくに襲われる。

それまで壊死していた危機意識が急速よみがえに蘇よみがえる。

気付けば、僕の呼吸は完全に平静を失っていた。

「——どうして」

遅まきながら盛大な焦燥しょうそうを感じる傍かたわら、同時に得たのは、強烈な違和感だった。

低下ひたひたしていた思考能力が危機感を切っかけにごく僅かな冷静さを取り戻し、この不可解な現状げんじょうに否応なく目を向けさせる。

——どうして、僕はまだ生きているんだ？

先に気付かなくてはいけなかった事柄ことづからだった。

何故なぜ自分は、6階層にいながら未だ五体満足なのか。

どうして僕は、曲がりなりにもこの階層のモンスター達と渡り合えていたのか。

考えてみればおかしいのだ。ダンジョンにもぐるようになって半月足らずの冒険者が、この

階層をともに探索して生き残れるわけがない。ウォーシャドウと遭遇してしぶとく生き繋げる道理はない。

自分は確かにあのハーフェルフの彼女から教わった筈だ。警告された筈だ。

駆け出し程度の半端な【ステイタス】では、この階層のモンスターには通用しないと――。

「――ステイ、タス?」

脳裏を一瞬横切ったのは、たった一度の更新で膨れ上がった、あの能力の異常な数値だった。まさか、という思いで思考が埋めつくされる中。

背中に刻まれている【神聖文字】が、熱を帯びたような気がした。

「あぐつつ!?」

突如体を貫いた振動が、意識を目の前の現実に取り戻す。

余計な思考に捕らわれた隙を突かれ、ウォーシャドウの攻撃が僕の身に直撃した。

返す手で放たれた裏拳気味の一撃が肩を殴り飛ばす。全身が横合いに吹き飛ばされる一方、強い衝撃により短刀を手の中から取り落としてしまう。

たった一つの武器が、乾いた音を鳴らして手の届かない地面の上を転がった。

「――」

横転した僕にすかさず被さってきた、文字通りの黒い影。

先程攻撃を放ったウォーシャドウとは別の一匹が、止めどばかりにその右腕を振りかぶる。

「――」

瞳孔が狹窄する。

眼前の光景に時間の流れがどうしようもないほど緩慢になった。

壮絶な勢いで過去の記憶が頭の中に流れていく。走馬灯か、今まで目にしてきた情景が片つ

端から再生された。

その中でも、一際鮮明な光を放つ憧憬との出会い。

「――」

そして、今も恩恵を与えてくれて……大切な、女神様の笑顔。

「ツッ!!」

次の瞬間、僕は全力で体を再起動させた。

ダンジョンの地面から跳ね起き、今まさに右腕を撃ち出したウォーシャドウ目がけ突っ込む。長い黒腕が頬の真横を通過していき、皮膚を削り取られながらも、握り締めた無手の右拳を敵の顔面へと叩き込んだ。

響き渡る、鈍重な破砕音。

「……、……!」

渾身の右拳は敵顔面の鏡面を割り砕き、頭部ごと貫通していた。

貫かれた後頭部から溢れ出すヘドロのような真つ黒な液体。互いの腕を交差した格好のまま短く痙攣したウォーシャドウは、全身から力を消失させがくりと膝を屈する。

「——ふッッ！」
止まらない。

モンスターの顔面から腕を引き抜き、仲間を倒され硬直した様子を見せる残る一匹に、電光石火の勢いで肉薄を仕掛ける。

床に落ちた短刀を走行の勢い緩めず拾い上げ、再装備。

地を疾走する野兎のように駆け抜け、敵の懐へと躍り込む。

体を揺らし迎撃に乗り出そうとしたウォーシャドウだったが、僕の行動が一步、勝った。
瞬く短刀。

斜め一線に振り上げられた斬撃が敵の胸部を切り裂く。

切り開かれた胸の奥で二つに断たれた『魔石』が儼く光り、そしてぼろりと崩れた。

音にならない断末魔を打ち上げ、モンスターの漆黒の総身が灰へと果てる。

ナイフを振り抜いた体勢のまま固まっていた僕は、大量の灰が崩れ落ちる光景を最後まで見届けた後、途端に脱力し乱暴に息を吐き出した。

「はあっ、はっ、は……っ！」

喘ぐ肺を野放しにして天井を仰ぐ。

緊張の糸が千切れ疲労がどっと押し寄せた。間違ひなく、ぎりぎりだった一戦にととうとう体が

音^ねを上げる。瞬^{またた}き目を薄く開けながら、早過ぎる鼓動の音をほんやりと聞いた。
自分の体はどうなつてしまっているのか。

敵う筈のなかった格上のモンスターの撃破。教え込まれていた常識を覆したのは、『ステイタス』の急激な『成長』によるものなのか。

自分の身に一体何が起きているのか、わからない。

次から次に湧き上がる疑問に僕はしばらく翻弄^{ほんろう}されていたが、出し抜けに膝が折れ曲がりそうになり、限界が近いことを悟る。止まらない自問を封じ込め、満身創痍^{まんしんそうよく}手前の体を動かし始めた。

今は一刻も早い脱出を。

そのように喚^{わめ}く理性に促され、広間の出入り口を目指す。

けれど、『迷^{まよ}がささない』とでも告げるかのように……ビキリ、と。

呼吸が止まる。顔を振り上げると、右手と左手、それぞれの方面の壁に蜘蛛^{くも}の巣のような亀裂が生じていた。あつという間に、都合四匹、先程の倍する数のウォーシャドウがダンジョンより産まれ落ちる。

……エイナさんが、不用意に下の階層へ近付くなど致命していた理由の一つ。

6階層、いや5階層からは、ダンジョンによるモンスターの生出頻度が格段に上がる。

僕は声を失い呆然と立ちつくしていたが、更にそこへ、追い打ちをかけるようにいくつもの唸り声が耳に届いてきた。

振り向けば、一つしかない出入り口の奥に沢山の獣の瞳が浮かび上がっている。

（……………ああ）

一匹、また一匹と6階層のモンスターが広間に侵入してくる。

唯一の出入り口も塞がれ退路を断られた、いわゆる詰みの状態。ウォーシヤドウも動き出しモンスターの群れに囲まれかけている。

にもかかわらず、僕の頭は驚くほど冷めていった。

「……………」

おもむろに歩き出し、先程屠ったウォーシヤドウの死骸へ腰を折る。

灰に変わった際に発生したドロップアイテム、『ウォーシヤドウの指刀』へ手を伸ばした。

三本残った内の一本の指を引き上げ、その即席の武器を左手に装備する。握りもない言わば刀身だけのナイフを握ると、手の平は簡単に裂けて、見る見るうちに血のしずくがこぼれ始めた。

——やってやる。

二刀の武器を携えた僕は目を強く吊り上げた。

疑いようのない窮地を前に抱いたのは諦念ではなく、絶対に死んでやるものかという決意と、

意地だった。

辿り着きたい高みがある。

こんな場所で躓いている暇はない。

自分を包囲したモンスターの輪から威嚇の声が上がる中、想いを新たにする。

ぼうっと熱を宿す刻印に押されるように、僕は武器を構え。

ややあって、迫りくるモンスター達と激突した。

試し読み版

ダンジョンに会いを求めるのは 間違っているだろうか

発行 2013年1月31日 初版第一刷発行
著者 大森藤ノ
発行人 新田光敏

発行所 ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒106-0032
東京都港区六本木2-4-5
電話 03-5549-1201
03-5549-1167 (編集)

装丁 ヤスダスズヒト
株式会社ケイズ (大橋勉 / 彦坂暢章)

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

乱丁本、落丁本はお取り替えいたします。
本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを
することは、かたくお断りいたします。
定価はカバーに表示してあります。
©Fujino Omori

Printed in Japan

GA 文庫



試し読み版はここまで！
続きは1月15日頃発売の本編にてお楽しみ下さい